

10 月下猛虎之図 大橋翠石 一幅

明治三十九年（一九〇六） 絹本着色 本紙二〇・二×九七・二

大橋翠石（一八六五～一九四五）は、生涯を通して虎を描き続けた画家である。慶應元年に岐阜県に生まれ、戸田葆堂、天野方壺、そして渡辺小華に絵を学んだ。知人に勧められて虎の絵に挑戦したのをきっかけに、翠石は見世物興行の虎を写生するなどして研鑽に励み、次第に迫真的な虎を描くようになっていった。

そうした中で翠石の名を一躍有名にしたのが、明治三十三年のパリ万国博覧会であった。この博覧会に「猛虎図」を出品した翠石は、橋本雅邦、川端玉章、荒木寛畝、今尾景年といった名高い画家たちが銀牌受賞に終わる中、日本画出品者の内でただ一人金牌を受賞したのである。今にも唸り声をあげそうな迫力に満ちた虎の絵が、パリの人々を感嘆させたのだろう。その後も翠石は、明治三十七年のセントルイス万博、明治四十三年の日英博覧会と、虎を描いて立て

続けに金賞を獲得している。

本図は、長く沖繩県知事を務めた男爵奈良繁の依頼に応じて明治三十九年に制作したもので、大正二年に同男爵より献上された。月明かりの下、鋭い眼光で虚空をにらむ一匹の虎を描いている。背面からとらえた虎の体軀には、一切形態の狂いがなく、虎というモチーフを意のままに描き出すことのできた作者の力量がうかがえる。また、月明かりを反射してきらめく体毛一本一本の描写も見事である。月夜に静寂をやぶって虎の咆哮がこだまする情景は、「猛虎一声山月高」などというように、しばしば漢詩の形で詠われてきたが、翠石の描くこの月下の虎も堂々たる風格とともに、孤高の気高さのようなものを感じさせる。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

虎・獅子・ライオン

— 日本美術に見る勇猛美のイメージ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 51

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年七月十七日発行

© 2010 The Museum of the Imperial Collections